

# 第 15 期(令和 6 年度)事業報告書

自 令和 6 年 4 月 1 日

至 令和 7 年 3 月 31 日

一般財団法人住環境財団

## I 現況及び概要

### 1. 事業内容

#### (1) 目的

地域社会への貢献という理念に基づき、環境活動、社会福祉、教育、文化その他公益の増進を目的とする研究及び事業に対する助成・支援を行うことを目的とする。

#### (2) 事業の範囲

上記の目的を達成するために以下の事業を行う。

- 1) 助成・支援に関する事業
- 2) 前号に関連する人材の育成に対する事業
- 3) 講演会、シンポジウム、セミナー等の開催に関する支援
- 4) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

## II 実施事業の概要

### 1. 助成・支援事業

○当年度に助成金を支払いした事案の実績報告

No.	助成機関名	助成金額	テーマ
(1)	東京大学	400,000 千円	UTokyo College of Design の開設
(2)	公益財団法人 国際文化会館	18,490 千円	歴史に学ぶ戦後 80 年記念セミナー
(3)	東京大学 東洋文化研究所	10,000 千円	南アジア・東南アジアにおける古代仏教 僧院の住環境に関する調査研究
(4)	東京大学 医科学研究所	5,000 千円	住環境の向上を目指した運動機能制御 に関する基礎的研究(継続)
(5)	一般社団法人 資源再読機構	42,100 千円	Memu Open Research Campus Project (継続)
(6)	東京大学 小石川植物園	20,000 千円	東京大学植物園における植物多様性研 究拠点形成の為の調査研究(継続)
(7)	東京大学大学院 農学生命科学研究所 東京大学生産技術研究所	11,500 千円	メムアグリプロジェクト(継続)
(8)	京都大学	3,000 千円	博物館収容環境整備(継続)
(9)	神戸大学	1,000 千円	高齢者施設の環境整備(継続) (人体から発生する汚染質の高効率な除 去のための給気・換気方法に関する研 究)
(10)	公益財団法人 山階鳥類研究所	800 千円	賛助会員(継続)
	合計	511,890 千円	

## (1) UTokyo College of Design の開設

### <助成先: 東京大学>

東京大学は、2027年9月に新たな教育課程 UTokyo College of Design を開設する。

東京大学は2027年に創立150周年を迎える。この間、日本のみならず世界的に教育・研究をリードするとともに、幅広い国際連携や、学術知と研究成果を活かしたイノベーションの促進を通して次代のリーダー育成を行ってきた。今回、未来社会に向けてさらなる学術貢献と人材育成の役割を果たすため、UTokyo College of Design という新しい学士・修士の教育課程の構想を全学連携で進め、開設する。学部の新設を行うのは1958年の薬学部以来約70年ぶりとなる。

東京大学は、「デザイン」を、一般に理解されている工業製品の造形や芸術的意匠に留まらず、新たな価値やシステムの創出、複雑な社会課題の解決に向けた創造的なプロセスを含めた幅広い概念として捉えている。

現在、私たちは、気候変動、高齢化社会、デジタル化がもたらす影響など、多くの複雑な課題に直面している。これらの課題は単一の学術領域だけでは解決できない。UTokyo College of Design では、多様な学術知を「デザイン」によって繋ぎ、融合することによって様々な課題に取り組み、世界にインパクトを与える人材の育成を目指す。学生は、デザインをスキルとしてだけでなく、思考の方法として学び、そして様々な分野でイノベーションを起こし、課題解決を先導する人材に成長していく。

修了生は、社会の様々なセクターで活躍するとともに、新しいビジネスの創造、新しい製品やサービスの創出、国内外での新たな社会システムや政策・ルール作りなど、多様な領域で未来を切り開く人材となる。

### 1) 実施概要

名称 : UTokyo College of Design

- ・ 課程 : 学士・修士の5年プログラム
- ・ 開設時期 : 2027年9月
- ・ 教育体制 : 世界中からトップレベルの教員を集め、すべて英語で実施
- ・ 入学定員 : 100名(外国・日本人学生、それぞれ50人程度)
- ・ 開設場所 : 東京大学本郷地区キャンパス(東京都文京区本郷)

2) 助成金額(設立準備金) 400,000千円 (2025年2月に支払い)

## (2) 歴史に学ぶ戦後80年記念セミナー

### <助成先:(公財)国際文化会館>

戦前の外交と安全保障の失敗、開戦・敗戦の原因と背景については、これまで多くの日本の歴史学者やジャーナリストが調査、研究してきた。しかし、戦後日本を襲った危機と失敗の数々、外交の蹉跎と安全保障の揺らぎ、国力と経済力の減退などについて、そのような調査、研究が体系的、横断的になされていない。

「歴史に学ぶ戦後80年記念セミナー」事業の一環として、戦後80年が過ぎようとしているいま、もはや「戦後の焦土から立ち上がって、奇跡的な経済成長を遂げた」というナラティブ

で回収できないはずの戦後日本の歩みを振り返り、その中で特に大きな 10 の敗北や喪失を“戦後における敗戦”として、これを直視し、その蹉跎の数々を生んだ日本の抱える構造的、組織的な問題点を浮き彫りにしたい。この戦後敗戦の失敗とそれを生んだ構造から目を背け続けられれば、これからの日本が進む進路においても同じ過ちを犯すことになる可能性がある。

### 1) 実施概要

戦後日本において「敗戦」と呼称するに相応しい 10 の蹉跎(石油危機・プラザ合意・湾岸戦争における外交敗戦・日米構造協議と構造改革・デフレ・半導体・インターネットとデジタル・尖閣諸島・新型コロナウイルス感染症・福島原発事故)を選択し、それぞれについて当事者・識者へのインタビュー、文献・史料の調査、先行研究の分析を進める。

### 2) 研究メンバー

国際文化会館 船橋洋一  
東京大学 加藤陽子 他

### 3) 助成金額 18,490 千円 (2024 年 4 月に支払い)

### 4) 今後の予定

本研究レポートを、広く社会にインパクトをもたらす為に、戦後 80 年を機として実業之日本社から書籍として 2025 年夏～秋に刊行する予定。

## (3) 南アジア・東南アジアにおける古代仏教僧院の住環境に関する調査研究

〈助成先:東京大学 東洋文化研究所〉

本研究は、古代仏教僧院の住環境を調査し、住環境の歴史を解明することを目的としている。古代南アジア・東南アジアの住居は残っていない為、その研究は不可能だが、古代仏教僧院が石窟に残っているため、仏教僧院の研究を通じて古代の住環境を解明することが出来る。そこで、南アジア・東南アジアにおける古代仏教僧院に関連するフィルム画像をデジタル化古代仏教の出家者たちの住環境の調査を進める。

### 1) 実施概要

南アジア・東南アジアの仏教僧院とそれに関連する美術作品を撮影してきたプロカメラマンである大村次郷氏による写真コレクションがある為、それをデジタル化する。資料の貴重性と画像の精細度により古代仏教僧院の住環境に関する研究を刷新し、ひいては東京大学を本研究に関連する国際的な重要拠点とすることが予測される点に本研究の意義がある。

大村次郷氏は、1970 年代から、仏教美術史研究者からの指導を受けながら、南アジア・東南アジアの仏教僧院やそれに関連する美術作品を撮影してきた。氏による 5000 点を超える写真群は、質量ともに、研究者らが撮影した写真群をはるかに凌駕する。さらに現在撮影できなくなった文化財の画像を大量に含み、世界に卓越したコレクションであるという点で 20 世紀日本の偉大な学術資産である。

しかしながら写真はすべてフィルム保存されており、将来フィルムの保存状態が悪化すれば、この貴重な資料が失われてしまう為、本研究で写真フィルム 2500 枚をデジタル化して、これらの総合的調査を実現する。デジタル化の作業は堀内カラーに依頼した。

## 2) 研究メンバー

東京大学東洋文化研究所 馬場紀寿

## 3) 助成金額 10,000 千円 (2024 年 5 月に支払い)

### (4) 住環境の向上を目指した運動機能制御に関する基礎的研究

＜助成先：東京大学医科学研究所＞

住環境の要素としての日常生活に着目し、その質的向上に必要な運動機能制御の理解を通じて住環境の向上を目指した基礎的研究を推進する。具体的には我々の呼吸や運動機能を支える運動神経による骨格筋収縮制御に必須の神経筋節合部(NMJ: Neuro muscular junction)を中核とする研究を実施する。NMJ は運動神経と骨格筋を結ぶ唯一の接合部であり、前者からの骨格筋伸縮シグナルである神経細胞の活動電位を、骨格筋伸縮の引き金となる筋細胞での局所的な脱分極に変換シナプス機能(神経筋伝達)を担うことから神経筋シナプスとも呼ばれ、その破綻は、呼吸を含めた運動機能の喪失を意味する。事実、NMJ の形成・維持・機能不全による神経伝達の異常な低下は為疲労性の筋力低下を特徴とする筋無力症の原因となる。それ故 NMJ を介した運動機能制御の改善は住環境の要素である日常生活の質的向上に直結する重要な課題と言える。

本年度の研究では、NMJ が形成される骨格筋の中央部分で特異的に発現する遺伝子として同定した Cabp7 遺伝子が NMJ の維持に必須の機能を担うという昨年度の発見を踏まえ、同じく骨格筋の中央部分で特異的に発現する遺伝子として同定した細胞内タンパク質 cPrt-x(仮称)遺伝子に着目し、cPrt-x の NMJ 形成・維持における機能解析を推進することで、その知見に基づく日常生活の質的向上への貢献を目的とする。

## 1) 研究メンバー

医科学研究所 山梨裕司

## 2) 助成金額 5,000 千円 (2024 年 4 月に支払い)

### (5) Memu Open Research Campus Project

＜助成先：(一財)資源再読機構＞

地域の多様性を資源として捉えることが今後の社会に強く求められている。このためには、ある地域に研究者が集まり、その土地固有の資源を再読し、理解し、生まれてくる多様な情報を資源化し、共有可能な形にする活動が求められている。このような活動には、母体となる場所が必要となると考えられるが、それはサテライトオフィスのような閉じた空間ではなく、広く地域に開かれたオープンキャンパスであることが求められると仮説を立てている。しかしながら、研究と社会が交わり偶発的創造性を得る機会をナビゲートする場所の在り方、そのようなオープンキャンパスのソフトとハード双方の統合的な管理手法などは既往事例がなく、新しいモデルを示していく必要がある。

これまでにプロジェクトメンバーは、多様な研究者が中長期滞在を行う「Research Retreat」の仕組みをつくり、またキャンパスの施設管理(ファシリティマネジメント)を応用したオープンキャンパスのマネジメントの仕組みづくりを検証してきた。2024年度はこれらの仮説立てられた仕組みを実際に社会実装し、社会に開けた Open Research Campus の社会展開性を検証するとともに、マネジメントのデジタル化を推進することで、より汎用性のあるモデルを検証した。

## 1) 実施概要

### ①研究施設環境整備

実験住宅棟、実習滞在棟、厩舎棟、農作物栽培、植生、動物の飼育、デジタルキャンパス

### ②Open Campus における「Research Retreat」滞在者の受け入れ

5 件の実績

### ③Open Campus の実施

「鹿を触る」2024 年 9 月 29 日(日)、「土地を食する」2024 年 11 月 2 日(土)~3 日(日)

### ④活動広報

ウェブサイトの制作・運用、研究の紹介展示(札幌・東京)

## 2) 研究メンバー

一般社団法人資源再読機構 森下有(代表理事)、小澤巧太郎(理事)

## 3) 助成金額 42,100 千円 (2024 年 6 月に支払い)

## (6) 東京大学植物園における植物多様性研究拠点形成の為の調査研究

〈助成先:東京大学 小石川植物園〉

東京大学植物園では現在、従来の分類学的特徴の記載にとどまらず、多様な野生植物の「生き物」としての特性を解明することで、野生植物の多様性に新しい理解をもたらすことを目指している。特に、昆虫などの動物との相互作用において、植物の色や形、匂い、花蜜成分、熱などがもつ、これまでに知られていない役割に着目しており、先端的な観察・分析手法を積極的に研究に取り入れている。また野生植物の形態的・機能的な多様性に着目し、その背景にある内部組織構造の解明に取り組んでいる。野生植物の生態の理解に先端的な観察・分析手法を取り入れることで、東京大学植物園を植物多様性研究の世界的な拠点として強化することを目指す。

また公開植物園として植物学の教育・普及にも力を入れており、ホームページなどを通じて研究成果の公開や植物園の価値の理解促進などを図っている。

## 1) 実施概要

当植物園では、自然界に生育する野生植物の多様性を、①花粉媒介者や種子散布者との相互作用の多様性、および、②葉や茎の内部構造の形態的、機能的多様性の 2 つの側面から研究している。2024 年度は、植物の高品質の組織切片が作成可能なクライオスタットを新たに導入し、授記の成長過程や生育環境の違いによる内部構造の変化を詳細に明らかにした。また蛍光顕微鏡や自動動画撮影装置を新たに導入し、花粉媒介者の誘引に寄与していることがわかりつつあるムラサキ科植物の蛍光色素の花弁

における局在や、趣旨に多肉組織をもつ裸子植物の種子散布者などを明らかにした。  
また日光分園のホームページのリニューアルを実施した。

## 2) 実施メンバー

川北篤(園長・教授)、種子田春彦(准教授)、望月昴(助教)、  
DiegoTavaresVasques(特任助教)他

## 3) 助成金額 20,000 千円 (2024 年 5 月に支払い)

## (7) メムアグリプロジェクト (湿地と共生する持続可能な農業ランドスケープの構築)

〈助成先: 東京大学大学院農学生命科学研究所、東京大学生産技術研究所〉

湿地生態系は、水質浄化や氾濫の緩和、気象条件の調節などにおいて重要な役割を担っているばかりでなく、特有の動植物相を有し、生物多様性の保全上極めて重要である。また湿地再生後長期的には気候緩和の機能も有している。しかし世界の湿地面積は森林の3倍の速度で消失しておりその保全と再生が急務となっている。

湿地再生化の中でも特に注目されている泥炭地の再湿潤化と農業利用を組み合わせた Paludiculture は適切な介入を行う事で、泥炭の形成・保全による炭素貯留と湿性植物の供給サービスの両立が可能となり、さらに湿地生態系の再生を通じて生物多様性保全にも大きく貢献することが期待される。北海道は日本の湿地面積の約 86%を有しているが、減少面積も日本一となっており、大正時代と比較して約 60%の湿地が消失し、その多くが宅地や農地に転換された。しかし近年こうした農地の休耕・耕作放棄が進むなかで、持続可能な農業の在り方が課題となっている。

そこで本研究では管理粗放化が進む十勝地域の農業生態系を対象として、湿地再生による環境保全と生物資源の利用の両立が可能となる様な持続可能な土地利用・管理方策を検討することを目的とする。

### 1) 実施概要

(湿地再生ポテンシャルの評価)

湿地再生を成功させる為には、植生、シードバンク、土壌等に左右される生態系の回復力、土地利用履歴などをあらかじめ把握する必要がある。2023 年度は北洋ガーデンファーム内の農地および湿地を対象に、農地及び周辺の生物的環境ポテンシャルとして現存植生及び埋土種子を、非生物的環境として地下水位及び地形を調査し、湿地再生ポテンシャルの予備的な評価を行った。2024 年度は、引続き調査・解析作業を継続することでポテンシャル評価の精緻化を図った。具体的には以下の手順により行った。

- ① ポテンシャル評価方法の検討
- ② 湿地再生適性マップの作成
- ③ 各評価指標に関する考察
- ④ 湿地再生適性マップに関する考察

上記の結果、地下水位、水道からの距離、植生、農地からの距離の 4 つの評価指標を用いた、湿性植物群落再生のための環境評価手法の検討を試みた。結果、原植生であると考えられるイワノガリヤスーツルスゲ群落の対照湿地を高スコアの区画として

抽出することができ、本手法によって湿地再生の適正を評価することが可能であることを示すことができた。しかし一方で、低位泥炭土が分布する地域内でも客土や耕起により土壌条件が異なり、湿地再生に影響を及ぼす可能性が示唆された。また、植生については圃場単位での評価に留まり、圃場内の微細な組成の違いを評価結果に反映させることが出来なかった。さらに、同等のスコアであってもそれを構成する各評価指標のスコアは異なり、区画によって異なる再生手法を検討する必要があることが明らかになった。

今後の研究では、土壌理化学性の分析や植生調査の精緻化による評価制度の向上や、目標とする湿地や選択する再生手法の違いによる評価指標の改変を検討する必要がある。

#### (果樹導入・栽培)

2023年度の初夏に屋内走路の果樹園に定植したペカン 30本のうち、約半数は活着していたが残りの半数は枯死していることを2024年10月26日に確認した。2025年度中に、ペカンの苗木の再導入を行う予定である。

#### (ランドスケープ計画と湿地再生の検討)

2023年度は、現地調査及びポテンシャル評価の思考結果に基づいて対象地のランドスケープ計画に着手した。2024年度は詳細なポテンシャル評価の結果を活用し、モデルエリアにおいて、ランドスケープ評価・計画・湿地および農地の空間配置等を検討したうえで、湿地と共生する農業ランドスケープのイメージの具体化を試みるとともに、上記結果に基づき、モデルエリアにおける湿地造成計画を策定した。

## 2) 研究メンバー

東京大学大学院農学生命科学研究科

藤原徹(代表、研究統括)、堤伸浩(研究統括・炭素貯留評価)、

岩田洋佳(湿地ポテンシャル評価)、三浦直子(湿地ポテンシャル評価)

大黒俊哉(湿地ポテンシャル評価)、本多親子(果樹の導入・栽培)

山本清龍(ランドスケープ計画)

東京大学生産技術研究所

沖一雄(果樹の導入・栽培)

## 3) 助成金額 11,500千円 (2024年5月に支払い)

## (8) 博物館収蔵物の劣化状況調査と収蔵展示環境の最適設計制御に関する研究

〈助成先: 京都大学〉

昨年度と同じ京都市内に存在する総合博物館と関東地方の美術館を主たる対象とした。対象施設では、収蔵室の二重壁構造において温湿度制御の不具合やカビ・結露の発生などが見られたり、展示スペースの空調制御が不適切で展示物の保存への影響やエネルギーの過大な消費が懸念された。

本調査研究では、以下の4項目を検討課題とした。

### 1) 実施概要

① 展示、収蔵スペースの空調・換気システムの運転とエネルギー消費の調査と空調最適

## 制御

関東地方にある美術館において、空調・換気設備システムまわり及び各展示、収蔵スペースの温湿度測定の結果に基づき、運転条件の見直しにより、資料保存の視点から室内環境が適切な範囲に収まっているか、空調機で処理される負荷にどのような変化があるかを調べた。

### ②収蔵庫の空気質環境の実態調査

RC造建物の地下に位置する文化財収蔵庫で、室内が高湿で文化財へのカビ不着が問題となっている収蔵室を対象として、季節を変えたエアサンプラーによる計測を行い、季節挙動を調べることと収蔵庫に保管されている文化財のカビクリーニングが実施された前後にエアサンプラーによる計測を行い、収蔵物のクリーニングの影響を検討した。

具体的には、昨年度は2023年3月と8月に実施したエアサンプラーによるカビの菌数測定を、2024年8月、11月、2025年2月に実施し、2023年8月、11月に採取した菌についてもDNAシーケンスを行い、各空間のカビ種の同定を行い、場所ごと、季節ごとの菌数の比較を行った。

### ③収蔵ケース内環境と非一様な収蔵室環境との関係

収蔵ケース内の温湿度は収蔵物を良好な状態に保つために適切に制御される必要があり、その実態を把握しケース内と非一様な周辺環境との関係を明確にした。更に、適切な保存環境を維持するための収蔵室と収蔵ケースの設計法について検討した。

### ④修理報告書に基づく文化財資料の劣化履歴の推定

文化財保存の環境基準の設定には、環境と劣化の関係が基礎となる。資料の現状の劣化は過去の長期に亘る収蔵環境の結果であると考えられるので、その資料が晒された環境を出来るだけ詳細に求め、劣化との対応を推定する方法が考えられる。そのような評価手法の可能性について当該博物館資料について検討を行うこと、特に博物館などが行っている修理報告書を(専門家の評価済)データベースとして、その可能性検討を行う。また当該博物館における資料を具体例として、環境条件の測定を行い、劣化程度との間の相関について検討した。

## 2) 研究メンバー

京都大学 銚井修一(名誉教授)

工学研究科 小椋大輔(教授)、伊庭千恵美(准教授)

## 3) 助成金額 3,000 千円 (2024 年 6 月に支払い)

### (9) 人体から発生する汚染質の高効率な除去のための給気・換気方法に関する研究

〈助成先: 神戸大学〉

ウイルスや臭気などの汚染物質は、換気により除去されるが、換気量を最小に抑えつつ、換気の目的を達成し、空調による消費エネルギーを抑えることが、コロナ禍以降、喫緊の課題となっている。人体由来の汚染質を想定して、給気と排気の方法(給気口、排気口の位置、大きさ、向き)を最適化することが課題である。

本研究ではオフィスや教室など複数人が共有する室内空間で実際に生じている換気性状を測定し、それを解析モデル内で再現し、その具体的な改善策を理論的に検討し、人体から発生する汚染質に特化して、効率よく汚染質濃度を下げる換気方法を検討した。

### 1) 実施概要

人が椅座で滞在している空間の代表例として、講義中の大学の教室を対象とし、滞在者の数・活動量・位置、吸気口、排気口の流量に応じた、二酸化炭素濃度分布を計算する。給気・排気の運転条件、給気位置を複数通り想定し、それぞれの場合の換気効率の評価をおこなう。

それらを踏まえて、給気・排気の改善ケースを考案し、数値流体解析によりその効果を検証する。具体的には、給気・排気口の位置、吹き出し・吸い込みの向き、風量を複数通り想定し、より効果の高い組み合わせを探索する。呼吸域での二酸化炭素濃度分布、室全体の換気効率を数値流体解析の結果から出力し、評価に用いる。また、現場での二酸化炭素濃度分布の測定を行い、数値計算結果との比較を行う。

### 1) 研究メンバー

神戸大学大学院工学研究科 高田暁(教授)

### 2) 助成金額 1,000 千円 (2024 年 6 月に支払い)

## (10) 山階鳥類研究所賛助会員(継続研究) <助成先:(公財)山階鳥類研究所>

### 1) 助成金額 800 千円 (2024 年 6 月に支払い)

### ○当年度以前に助成金を支払いした事案の実績報告

No.	助成機関名	助成金額	テーマ
(1)	公益財団法人国際文化会館	7,000 千円	「グローバル・アーキテクト・シリーズ」講演会等の開催

### (1) 「グローバル・アーキテクト・シリーズ」講演会等の開催

<助成先:(公財)国際文化会館>

Architalk は環境やテクノロジー、歴史、アート、コミュニティなど、様々な視点から建築・デザインが社会的に果たす役割や可能性について考える事業である。

当該年度は、国際的に活躍する 2 名の建築家を海外より招聘し、国際文化会館での講演会のほか、関西地区での講演会や日本の建築家との対話の場を創出した。

また京都および東京での講演会をより多くの方に還元するために収録した講演会動画を一般に配信を予定。

### 1) 実施概要

①2024 年 11 月にフランシス・ケレ氏を招き東京講演会 テーマ「ギャップを埋める力(気

- 候、文化、マテリアル、そして建築)」を開催(参加者:161名)
- ②2025年3月に徐甜甜氏を招き東京講演会 テーマ「万物～生きたシステムとしての建築」(参加者:95名)、京都講演会 テーマ「集团的記憶としての建築(参加者:50名)  
(2023年5月に助成金7,000千円支払い、2025年4月末に残金740千円返済)

### Ⅲ 評議員及び役員に関する事項(令和7年3月31日現在)

#### 1 評議員

役名	氏名	就任年月日	区分
評議員	坂村 格	令和 4年5月19日	非常勤
評議員	河野 雄介	令和 4年5月19日	非常勤
評議員	眞田 容子	令和 4年5月19日	非常勤

#### 2 理事及び監事

役名	氏名	就任年月日	区分
理事長	高畑 久明男	令和 6年5月8日	常勤
理事	佐久間 司	令和 6年5月8日	常勤
理事	潮田 洋一郎	令和 6年5月8日	非常勤

監事	和田 芳幸	令和 5年5月9日	非常勤
----	-------	-----------	-----

### Ⅳ. 理事会・評議員会の開催状況

#### (1) 理事会(通常)

日時:令和6年4月26日

開催場所:潮田理事事務所

- 決議事項:第1号議案 第14期(令和5年度)事業報告の承認を求める件  
 第2号議案 第14期(令和5年度)財務諸表等の承認を求める件  
 第3号議案 定時評議員会招集の承認を求める件  
 第4号議案 基本財産の株式に関する議決権行使の承認を求める件

出席等:決議に加わることの出来る理事3名中3名が出席し、議案に対して全員一致をもって承認可決された。

#### (2) 評議員会(定時)

日時:令和6年5月8日

開催場所:書面決議

- 決定事項:第1号議案 第14期(令和5年度)事業報告書の承認を求める件  
 第2号議案 第14期(令和5年度)財務諸表等の承認を求める件  
 第3号議案 理事選任の承認を求める件  
 第4号議案 定款の一部変更の承認を求める件  
 第5号議案 理事報酬の変更の承認を求める件

出席等：提案書に対し、評議員全員の書面による同意の意思表示により、評議員会の決議があったものとみなされた。

### (3) 理事会(臨時)

日時：令和6年5月28日

開催場所：ZOOMでのリモート開催

決議事項：第1号議案 代表理事選任の承認を求める件

出席等：決議に加わることの出来る理事3名中3名が出席し、議案に対して全員一致をもって承認可決された。

### (4) 理事会(通常)

日時：令和7年2月20日

開催場所：ZOOMでのリモート開催

決議事項：第1号議案 第15期(令和7年度)事業計画の承認を求める件

第2号議案 第15期(令和7年度)正味財産増減予算の承認を求める件

第3号議案 令和7年度資金計画及び設備投資の見込みについて

第4号議案 東京大学 College of Design 設立支援(4億円)について

出席等：決議に加わることの出来る理事3名中3名が出席し、議案に対して全員一致をもって承認可決された。

### (5) 理事会(臨時)

日時：令和7年2月27日

開催場所：書面決議

決定事項：第1号議案 第15期(令和6年度)事業計画の変更

第2号議案 第15期(令和6年度)正味財産増減予算の変更

第3号議案 第16期(令和7年度)正味財産増減予算の変更

出席等：提案書に対し、理事全員の書面による同意の意思表示により、理事会の決議があったものとみなされた。